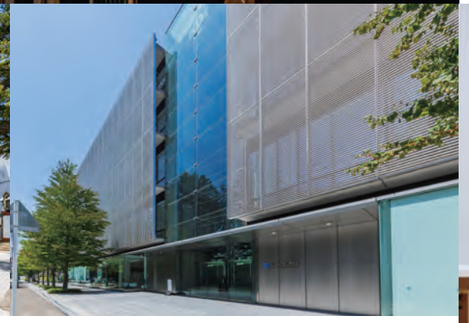
東北学院大学の歴史とキリスト教教育

個人の尊厳の重視と、人格の完成をめざす。



東北学院大学の
キリスト教教育の本質

東北学院大学は、W･E･ホーイの協力のもと押川方義が「仙台神学校」を設立して以来、マタイによる福音書第5章13節の教え「地の塩、世の光」と、「LIFE LIGHT LOVE」を建学の精神として掲げてきました。LIFE（命）、LIGHT（光）、LOVE（愛）は、かつて仙台の街を襲った大火で全焼した旧校舎にかわり、第二代院長D･B･シュネーダーが中心となって1922年に再建された中学部新校舎の正面に刻まれた言葉であり、「3L精神」として脈々と受け継がれてきました。「命」とは、神から与えられた人としての尊厳・人格。「光」とは、暗い時代を照らし、未来を拓く知識。「愛」とは人をいつくしむ、隣人愛の精神。このキリスト教の教えに基づく「個人の尊厳の重視と人格の完成」の教育により、本学では、文化の発展と社会に貢献する人材の育成をめざしています。創設者らが理想としたキリスト教教育は、2015年に導入したカリキュラム「TGベーシック」として結実。多彩な共通教育科目による教養と各学科の専門性に加え、知力を柱に人々とともに生きる姿勢・心を持つ、豊かな人間性を育みます。

東北学院の礎を築いた
3人の宣教師

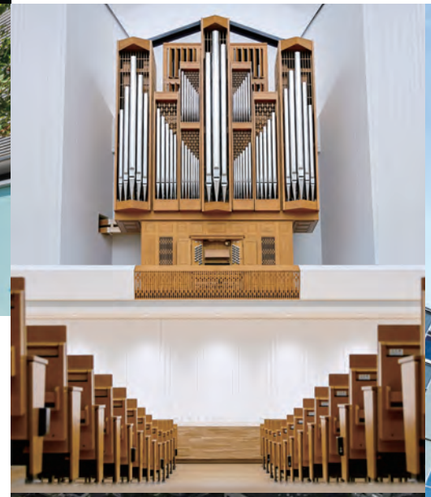
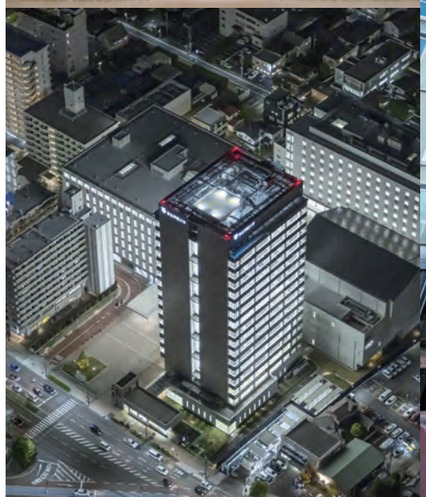
日本のキリスト教伝道を担っていた押川方義が拠点を東北に移したのは1880年代のことでした。仙台で伝道活動中、宣教師として来日したW･E･ホーイと出会い、活動を共にします。やがてホーイの下には、新しい知識を求める青年たちが集まるようになり、1886年、私塾「仙台神学校」を設立します。翌年来日した宣教師D･B･シュネーダーが教授として加わり、キリスト教の信仰に基づく「個人の尊厳の重視と人格の完成」をめざしていくことになったのです。

初代院長（1850〜1928）
押川方義

初代副院長（1858〜1927）
W･E･ホーイ

第二代院長（1857〜1938）
D･B･シュネーダー

南町通りに仙台神学校校舎が完成し、校名を「東北学院」に改称。1922年に再建された中学部校舎（通称「赤レンガ校舎」）の正面には、現在のスクールモットー「LIFE LIGHT LOVE」が刻まれていました。現在の大学本館は旧専門部校舎であり、戦後の東北学院再興の象徴でもあります。

新たな時代を切り拓く、
「知」の拠点

第二代院長に就任したシュネーダーは、50年にわたり学院の発展に尽力しました。1891年、キリスト教伝道者育成をめざす仙台神学校が今日の「東北学院」に改称され、普通教育・高等教育機関として整備されていくこととなります。世界的な経済不況や、度重なる戦禍を乗り越えてきた東北学院大学は、戦後、平和と民主主義を軸とする新しい教育理念に基づき、文経学部を擁する新制大学を設置。その後も数々の教育改革を成し遂げ、東北で唯一の私立総合大学としての地位を築いていきます。そして新制大学として70年以上、これまでおよそ20万人もの卒業生を送り出してきた東北学院大学は、2023年4月に開学した「五橋キャンパス」の下、新たな時代を切り拓く人材を育成し続けています。